様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００６０４

研究課題名（和文）中国語上古音研究資料総合データベースの構築

研究課題名（英文）Construction of a Comprehensive Database of Research Materials on Old Chinese

研究代表者
鈴木　慎吾（SUZUKI, Shingo）

大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・准教授

研究者番号：２０５１３３６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　中国語音韻史の中心課題の一つである、いわゆる上古音は、その後の時代に比べ資料が断片的かつ膨大であることもあって、従来様々な仮説が立てられてきた。しかし、議論が多岐にわたるため、その全体像を理解することはなかなか困難で、そのことが研究の妨げになっている現状がある。
　本課題はとくに上古音の学術史を整理し、研究基盤を構築することを目的としたものである。具体的には、①諸家による歴代韻文の解釈、②諸家の上古推定音の整理を基礎とし、それらを③構築済の中古音データベース群と接続することで、中国語音韻史を通時的観点から一覧できる総合データベースの構築、公開を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　諸家による歴代韻文の解釈については、従来個別に存在していた研究成果を一つのページにて一覧、検索することができるようになり、インパクトは大きいと思われる。
　上古推定音のデータベースについては、既存のものは単純な検索システムに過ぎないものが多く、不十分な点が多かった。つまり、音韻資料に適したシステムとしての工夫が決定的に不足していた。今回の上古音データベースは、申請者がこれまでに構築してきた中古音データベース群と統合し、音韻体系の通時的変遷を分かりやすく表示する仕組みを構築した。このような形で研究基盤を構築し公開することには大きな社会的意義があると言えよう。

研究成果の概要（英文）：One of the main themes in the history of Chinese phonology is the so-called Old Chinese, and various hypotheses have been put forward in the past, partly because the materials available are fragmented and voluminous compared to later periods. However, because the discussions are so diverse, it is quite difficult to understand the overall picture, which is currently hindering research.
This project aims to organize the academic history of Old Chinese phonology and build a research foundation in particular. Specifically, based on (1) the interpretations of verses by various scholars throughout history and (2) the organization of the various scholars' reconstructed ancient pronunciations, and by linking these with (3) the already constructed Middle Chinese phonology databases, we have constructed and made public a comprehensive database that allows a diachronic view of the history of Chinese phonology.

研究分野：中国語学

キーワード：中国語上古音　押韻　詩経　先秦　両漢　魏晋南北朝　推定音

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

先秦時代の中国語音、いわゆる上古音の研究は、まずは中古音（六朝～隋唐音）が出発点となる。研究代表者はこれまで、中古音に関する様々なデータベースを公開し、研究基盤を築いてきた。本課題では、上古音に関するデータベースを構築し、既構築の中古音データベースと接続し、様々な通時的現象を網羅的に検証するためのプラットフォームを構築することを目指している。ところで先秦時代の中国語音、いわゆる上古音に関する研究は、①主に清朝の学者による分部の段階、②Karlgren 以降の音価を中心とした段階、また③いわゆる「新派」学者による、対音・非漢語資料および出土資料を積極的に導入した段階の三段階に分けることができる。それぞれの段階には膨大な研究の蓄積があり、それぞれ適切に再検証を行う必要がある。

上記の①は『詩経』その他の韻文を根拠として、古代の韻の枠組み（分部）を推定する研究である。しかしながら、諸家の押韻の認定には出入りがあり、そのことは往々にして彼ら自身の分部説と関連している場合が多い。つまり、清朝の分部説を理解するには、個々の押韻を一つ一つ確認する必要があるのだが、網羅的に調査しようとすると大変な手間が掛かる。

②は①の成果を基礎として、中古の推定音を上古に当てはめていく研究である。中古と上古とでは体系の枠組みが違う上に、この段階では諧声系列（たとえば「支、技、妓」のような組）の解釈が中心課題とされ、それらをうまく説明するべく音声を推定するわけだが、諸家によって様々な案が出され、結果的にそれらの推定音はかなり分岐してしまっている。

③の対音資料は、外国語から音訳された古代の中国語表記を根拠に上古音を推定する研究であり、史書と初期仏典が主な材料となる。また近年は言語の同族関係を背景にした蔵文、緬文、泰文などの非漢語資料の利用も進んでいる。いわゆる「新派」の学者が主な担い手だが、重視する資料の違いや、解決方法の違いにより、彼らの推定音は同じ上古音とは思えないほど、相互に異なる部分が多い。

２．研究の目的

本研究の目的は、上古音研究の各種資料を整理することで、新たな研究のための基本インフラを構築することにある。具体的には以下の項目の実現を目指す。

①上古押韻データベースの構築

②上古推定音データベースの構築

これらを相互に結びつけ、さらに③構築済の中古音データベース群と連携させて、ウェブブラウザで分かりやすく検索・表示できるサイトを構築する。

３．研究の方法

(0) データフォーマットの検討

今回、データベースを構築する上でのフォーマットを検討した。検討の結果、従来用いていた MySQL を利用することとした。また、サンプルデータを構築し、具体的なデータ形式について検討を行った。

(1) 上古押韻データベースの構築

韻文に対する押韻解釈は古くから行われてきたが、それぞれの分部説によって具体的な押韻の認定が異なるということがしばしばある。本研究では『詩経』を初めとする主要な先秦文献を対象とした諸家による押韻、およびその韻部を網羅的にデータ化した。

(2) 上古推定音データベースの構築

諸家の上古推定音を一覧できるデータベースを構築した。まずは前回科研で構築した『広韻』のデータに Karlgren“Grammata serica recensa”の情報を結びつけ、その後諸家の推定音をぶら下げるという方法を採った。課題開始以前に、すでに鄭張尚芳『上古音系』と Baxter“Handbook”については先行して作業に着手していたが、これらを完成させ、また加えて Schuessler の OCM についてもデータ化を行った。。

(3) 検索システムの構築・中古音データベースとの接続

以上 2 種をバックグラウンド・データとした検索システムを構築した。これはウェブ上に公開し、上古音研究の基本インフラとして供する。

研究代表者は前回、前々回の科研課題によって中古音の総合データベースをすでに構築している。上記の上古音データベースはその中古音データベースに接続し、上古音から中古音への変遷を分かりやすく表示するシステムの開発を行った。

４．研究成果

本課題の目的は上記に記したとおり、①上古押韻データベースの構築、②上古推定音データベースの構築、③構築済の中古音データベース群との連携、であった。これらの目的は、最終的にほぼ達成されたと考える。冒頭にも記したが、とくに①上古押韻データベースの構築については、諸家による歴代韻文の解釈を単一のページにて一覧、検索することができるようになり、インパクトは大きいと思われる。なお、予定では対象資料を先秦文献に限るつもりであったが、成果の

有用性に鑑み、対象を六朝末までに広げて構築を行った。

途中段階での成果を、国内の学会、研究会にて現況について報告し（漢語上古音データベース「諸家詩經韻讀」の構築について、「平安時代漢字字書総合データベースの機能高度化と類聚名義抄注釈の作成」研究集会、北海道大学（オンライン）、2020 年 9 月 25 日；漢語音韻史・研究史の両方について体系を理解しつつ検索可能なデータベース群の構築について（講演）、第 87 回大阪市立大学中国学会（オンライン）、2021 年 12 月 4 日）、貴重なご意見を得て、構築方針の改善等を行った。また、途中段階ではあるが、成果の内容について論文の形式で報告を行った（古漢語音韻データベース「諸家詩経韻読」の構築、外国語教育のフロンティア、4、pp. 1-7、2021 年）。また、課題遂行中に対転関係について考えた内容について、発表を行った（清朝学者の音韻観――とくに対転関係における宵部の扱いについて、古典から近代へ：清代と民国期の学問、大阪大学、2022 年 8 月 10 日）。

課題終了後の今後はさしあたり六朝末までの押韻データの完成を目指す。また、諧声や仮借情報などのデータ化も行うことで、より総合的なデータベースの構築が望まれる。

今回の成果は以下のウェブサイトで公開している。

〇篇韻データベース

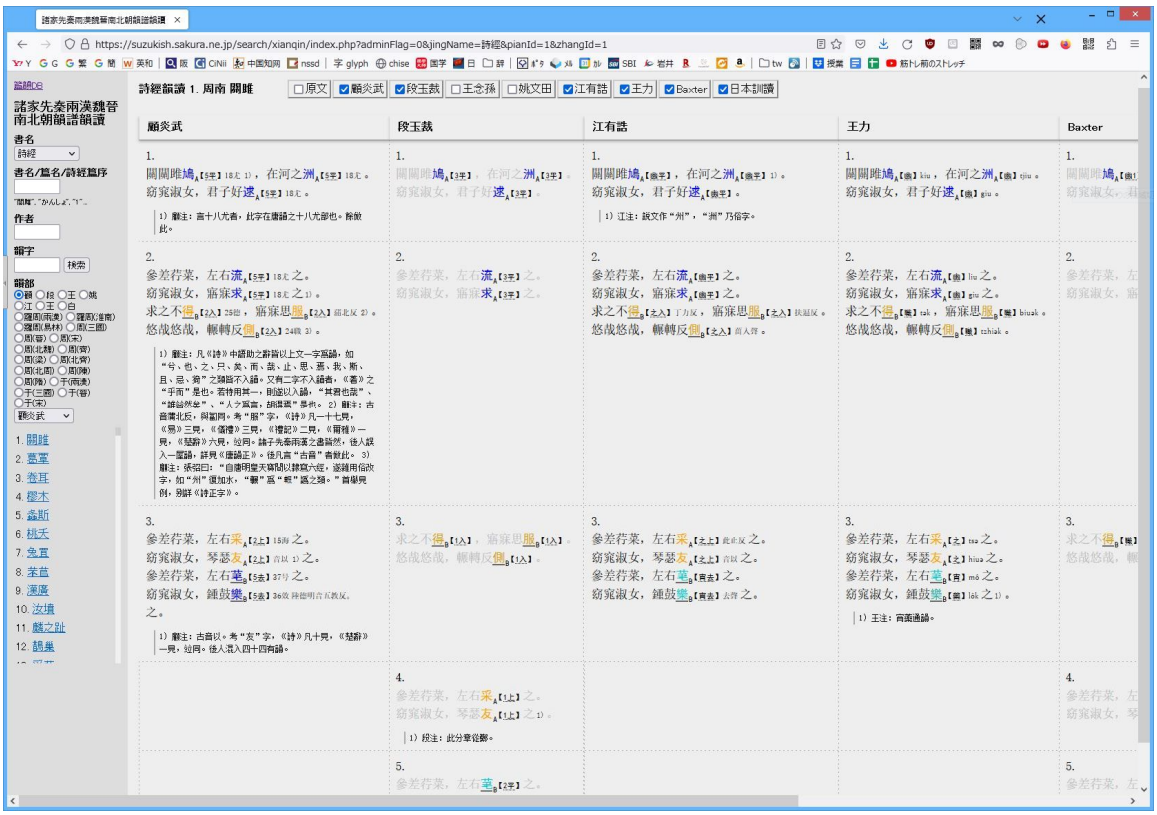
https://suzukish.sakura.ne.jp/search/

①Web 韻図

https://suzukish.sakura.ne.jp/search/inkyo/index.htm

②諸家先秦兩漢魏晉南北朝韻譜韻讀

https://suzukish.sakura.ne.jp/search/xianqin/index.php



５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 鈴木慎吾	４．巻 4
２．論文標題 古漢語音韻データベース「諸家詩経韻読」の構築	５．発行年 2021年
３．雑誌名 外国語教育のフロンティア	６．最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 鈴木慎吾
２．発表標題 漢語音韻史・研究史の両方について体系を理解しつつ検索可能なデータベース群の構築について
３．学会等名 第87回大阪市立大学中国学会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 鈴木慎吾
２．発表標題 漢語上古音データベース「諸家詩經韻讀」の構築について（上古音入門講座を兼ねて）
３．学会等名 「平安時代漢字字書総合データベースの機能高度化と類聚名義抄注釈の作成」研究集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 鈴木慎吾
２．発表標題 清朝学者の音韻観――とくに対転関係における宵部の扱いについて
３．学会等名 古典から近代へ：清代と民国期の学問
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

篇韻データベース https://suzukish.sakura.ne.jp/search/ Web 韻図 https://suzukish.sakura.ne.jp/search/inkyo/index.htm 諸家先秦両漢魏晋南北朝韻譜韻讀 https://suzukish.sakura.ne.jp/search/xianqin/index.php

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関